

破れ鍋に綴じ蓋¹

黒 岩 誠*

1. 「破れ鍋に綴じ蓋」療法??を目指して

ノーベル賞を受賞する方々は素晴らしい才能をお持ちだけれど、実は才能が花開くにはほとんどの場合、素晴らしいパートナーに恵まれていたのだろうと考える。人並外れた才能の持ち主は、一般的に偏りが大きい分アンバランスで、いうなれば、「破れ鍋」といっても過言ではない。

素晴らしいパートナーとは特異的な「破れ鍋」にフィットした特異的な「綴じ蓋」なのであろう。

これまでの仕事で、豊かな才能を隠し持っているはずの、どんな「破れ鍋」にもぴったりはまる「綴じ蓋」でありたいと、私は努力してきたつもりだ。

実は、心理臨床の世界はこうあるべきだと信じている。私は自分が素敵な「破れ鍋」であるよりも、どんな「破れ鍋」にも合わせられる「綴じ蓋」でありたい。もし「破れ鍋」にぴったりな「綴じ蓋」で蓋ができるならば、「破れ鍋」でなければあり得ない社会的に極めて高い価値を産み出すことができると信じるからである。

そう、「綴じ蓋」要因の強い人は「破れ鍋」から漏れ出すものには無頓着で、「破れ鍋」にいつのまにかたまった滓（おり）のように濃厚な素晴らしさに気づくことができる。

なんと倅せなことが！

2. わたしの生きた時代、現代とは！

——60歳の分水嶺——

この歳になってやっと自分の生きた時代が自覚できそうな気がする。目隠しをされて生きてきた主観としての「戦後」と60歳にしてアイデンティティーとして理解した「20世紀」。

1947年生まれ私にとって「あなたの現代は？」と問われれば、1945年の第2次世界大戦敗戦以降と答えてきた。敗戦という時代性が一番大きな要因ではあったが、その中で最大の要因は大人が目を見逃したかった「戦前、特に戦中」と、とってつけた「戦後民主主義」。大きな変革に対応しきれない「現代史の教育」の空白はひとつ前の時代の印象を子どもたちに

刻印づけることをなぜか恐れていた。

私が2007年、還暦を迎えて、ふと自覚した「主観的現代」は1900年以降、「20世紀」であり、わたしの60才までの現代、「戦後」とは「前半の空白」を自覚できない「20世紀」だったのだ。

1990年、最初にヨーロッパを訪ねた時の印象はおどろおどろしい宗教画の世界だった。2008年、モネのアトリエなど印象派の世界に触れて、「私たちの世界」を感じた。

そういえば、ビネーの知能テストも1905年、フロイト充実した著作の数々を20世紀に入って世に著した。歴史上の天才たちに師匠のような同時代人的親近感を感じている。

3. 記憶の中の成育歴

「綴じ蓋」としてのわたくしの傾性

——幼いころから辿ってみると——

〈不安：3～4歳〉

風邪をひいて熱を出して、母親にみかん湯を作ってもらって気持ちの良いのど越しを楽しんでうとうとしはじめる時の夢。どこまでも どこまでも 真っ暗な井戸を落ちてゆく。いつか底にドサッと落ちて、痛い目に合いそうなのに一向にそんなことは起こらずに落ちてゆく。

ただそれだけ。

〈自由：4～5歳〉

チンドン屋についてゆく。何の不安も感じずに、ついてゆき、何事もなかったかのように帰宅するが、搜索願が出され、ひと騒動持ち上がっている。

記憶にある限り、一人でいることの不安はない。いまだに、世界のどこで放り出されても、そこがひとの住む世界ならどうにかなるかと考えている。

それを、自由と感じる。

〈宇宙観：7～8歳〉

冬の日がガラスを通して、埃の舞うのを浮かび上がらせる。

埃の一つを夢想する。自分がどんどん小さくなって

この埃の一粒が地球のような存在。もっともっと小さくなって、小さな世界で私は自分の家のガラスを通して埃の舞うのを眺めている。

夢想の世界はさらに広がって、私はさらにどんどん小さくなって……

そんなことを何回繰り返したら、それ以上小さな世界はなくなるのだろうかと考えたような気がする。

〈葛藤：13歳〉

漠然とした自己不全観。漠然とした葛藤にさいなまれ、衝動的に家出を決意した。

バッグに着替えを放り込んで、上野駅から自宅に「ジブンヲタメス」と電報を打って夜行列車におずおずと乗ってみた。

夜行列車は混んでいた。お姉さんがスカートから太ももを出して眠りこけているのが見えた。それが少年らしく気になって仕方がない。こんなことが気になって、何が「ジブンヲタメス」だと気が付いた。

始発の列車で帰ってきた。父親が泣き顔で玄関まで飛び出してきた。たぶん中2のころだった。

〈アイデンティティ：20歳〉

自己実現とフリー・セックス。

1960年代、学生たちは自分たちの力で社会が動かせるような気がした。だから、体を張ってデモにも行った。

ヒッピーと呼ばれた若者は、E. H. エリクソンを信奉し、世界中を放浪し、フリーセックスを謳歌した。

セックスしないこともフリーセックスと内心納得していた。

私は自由なのだ！

〈権力と秩序：20歳〉

——安保反対と機動隊のお兄さん——

中学の柔道部に入部して1週間で審査会があり、初段の2年先輩を背負い投げで1本勝ちして、1級を認定された。苦労もなく認定された1級のありがたみはなかったので、退部した。

退部までの間、お隣の機動隊の道場でけいこをつけてもらった。機動隊の柔道は喧嘩柔道で、足払いは返さずに、蹴飛ばす。

大学に入って「革マル」のデモに参加した。みんなで地下鉄にただ乗りするのが趣味に合わなかった。ジュラルミンの盾でぶつ飛ばされると、みんな感情をむき出しにぶつかるのだが、私には柔道の練習と50

歩100歩だ。青あざを創ったくらいで本気にはなれなかった。

4. わたしの鬱：35歳と70歳

鬱と生命力。35歳と70歳で鬱を経験した。私の鬱はストレスの蓄積に比例して反応をはじめる。エネルギーを使い果した瞬間強い鬱反応を示すので自覚しやすい。

〈鬱：35歳〉

35歳の時、向こうから走ってくるバスの運転手さんをほんとにうらやましく感じた。ルーチンが終われば、いっぱい飲んでぐっすり寝られる。

服薬すると気持ちは活性化したものの、アグレッションが出るようになった。この時自覚したメンタルな自画像は「意地の悪い極悪人」であった。

もともと意地悪をベースにユーモアの鎧を着せてブラックユーモアとして表現していたものが、ユーモアの鎧を失って、ただの意地悪に成り下がっていた。

服薬を中断し、授業以外の仕事をすべて放り出し、日がな一日コンピュータの前に座って、あたかも仕事をするふりをして、過ごした。

ある晩、ふろに入って、明日が来なければいいと念じてあたたまっていた。

「私はなぜ、こんなちっぽけなことに悩んでいたんだろう。」とふと思った瞬間、鬱の呪文から解放されていた。

〈鬱：70歳〉

70歳を迎えて、認知的なエラーが頻発することを自覚し始めた。日常生活に不便をきたす。これに鬱反応が加わると忘れることに対する不安が累乗的に増加する。人様にご迷惑をおかけするのではないかといった不安の形をとる。

社会的な約束は、一方的ではないので現実には私が忘れていたとしても実行時まで全くチェックされずに突然約束を不履行することは基本的にほとんどない。

70歳の歳は、鬱を本質的に柔らかに包み込み始めている。体力と認知能力が加速度的に低下したので生きることへの諦観がうまれている。

古希を迎え、私の死生観は、十分に生きた実感で満たされた。少し目をつぶって気が付いてみれば、向こう側からこっち側を覗いている、そんな形がよいと思っている。

私の加齢の勾配は5年もたてば そのあとは永遠に

フラットになるのではないだろうか。

5. 沢山の破れ鍋たち

これまでの黒岩の自分自身の回想は、本人の自己開示です。これ以降の方々に対する回想は、プライバシーに配慮して本質をお伝えできるレベルで、個人を特定できないようにモディファイいたしております。

〈印象に残る何人かの人たち〉

仕事の上で心に残る何人かの人々がいる。彼らの主訴ではなく、すなわちその人の「破れ鍋」的社会的問題点は問題としないで「破れ鍋」からこぼれてしまった、まるで空になった鍋の底に、滓がたまり、滓が醸すその人らしいゆたかさ。これが私にとっての宝物。

〈入学時から不登校で、初回面談で1度だけ対面し巣立った男子学生〉

その後母親が週1で来室し、4年間1度も登校せず、5年目からきちんと就学し、8年間を経て、すつなく就職し巣立った男子学生。彼の顔は1度あっただけで時間の経過とともに思い出せなくなった。彼の心は母親という真綿でくるまれていて、直接まさぐることはできない。毎週、真綿のお包みが燃れてしまったような母親の心を丁寧に整えて、彼のもとにおくり出す。

最初の4年間は真綿のお包みを整えることに費やされたような気がする。その後の4年間は本人が自分で燃れたお包みを自分で整えることができるようになった。実質的には5年目から私はニコニコと母親の言葉に耳を傾けただけのような気がする。

5年目には終結すべきだと思いますか？

私が見ていなかったのです。

〈毎年、目いっぱい単位を登録し、8年間で卒業単位を取得した男子学生〉

この時代に合理的配慮が叫ばれていたなら、彼はもっと幸せだったのだろうか。

彼自身が大きな社会枠の中で苦悩し、臨み、自分だけの力で獲得した社会性は彼の中核を形成しているものと思う。

毎週同じ時間に予約を入れている彼は、時々、無断でキャンセルする。自宅の門を出るところで隣人と鉢合わせすると1日家から出られなくなる。

2畳ほどのカウンセリングルームにたどり着くと問いかけに最低限の返答を返し、ほとんど語らない。何

となく、ぼんやりと私の前に座っている。

話すことにカウンセリングの意味を置くとすると私は何もやっていない。……が、実をいうと彼が退室した後の虚脱感はとても大きい。

彼は、地方の自動車工場の季節工をやっていて、週に1度予約の日に電話をよこし、無言に近い電話カウンセリングをする。これも同様に私に虚脱感を残していった。

毎年、登録科目の半分くらいを単位取得して8年間で卒業していった。

1週間分のメンタルエネルギーを、私からガソリンのように補給して、何もしゃべらなくても来週までのエネルギーを満タンにしていっていった。

〈花を見つめてたちなおっていった女子学生〉^{※1}

震災のメンタルヘルス支援。なにをしたらいいのか、当惑していた時にこの女子学生のことを思い出した。万の言葉よりも1輪の花が閉じられた心を開く。

南の島の普通の女の子。心理臨床の枠だけではとらえきれない隙だらけの若い女性に私はどうにも無力だった。

言葉がないと言葉以外の何かを私から届けられるかと考えた。映画でも小説でも女心をとらえる道具立て、陳腐な宝石はダメ、1輪の花だった。コスモスでもバラでも1輪の花に語らせればいいと思った。

「1週間に1度花を1輪買って、あなたの部屋のテーブルに飾るんだ。」

「朝起きたら10分間、この花を見つめて、できたら声を出して話してごらん。1週間に1輪くらい買えるだろ！」

後日談、ある日、その女性が両親と私を訪ねてきた。お礼をいうために！卒業して故郷に帰るとのことだった。

ちなみに、被災地支援では村中に咲いているコスモスは失格で、1輪でも花束たりうるバラを選んだ。

〈留学時の体験をひたすら語った女子学生〉^{※1}

PTSDというのは、荒っぽい表現をすると「その場で死んでしまえばそれで済んだのに、黄泉の国、しかも地獄から無理やり現世に引きずり出される経験」といえるでしょう。

その学生は見たところ清楚なお嬢さんでした。もともと清楚なお嬢さんだったといっていました。

ところが、高校時代、日本人の1人もいない外国の田舎町に1人で留学し、異文化とはいえ、私も初めて

耳にするような高校生の乱痴気ぶりを語るのです。

その女性はただただ何もできずに逃げる場所もなく見ているだけだったと語ります。

私は私でなすすべもなく、どぎまぎしながら聞いておりました。

ただそれだけの話です。

6. 心のふるさと

東京育ちなので、死に場所はいまだにどこでもいいと思っています。一人で死を迎えることも幸せの必要十分条件の範疇にあります。

でも、2011年3月の東日本大震災で新たな自分に気が付きました。学生時代、年間30日くらい過ごしていた漁村が「心のふるさと」であることを。

朝、目覚めたら、おしっこをしながら、海の様子を

眺めなければ生きていけない海の男がいるのも事実です。

そんな男が海まで2kmの距離を、目のくらむような橋から海風をはらませて空を飛んで帰って行きました。2011年、1本の赤いバラを手に、このバラを根付かせると笑顔で応えた海の男でした。

現実の矛盾に目がくらんだ時、結構優先順位の高い選択肢です。

注1：2つの女性のケースは性的虐待の範疇に入るので具体的な事象表現を避けています。

若い男性カウンセラーはこの時、挑発や疑惑の対象として試され続けます。